

ポスター | 1-09 集中治療・周術期管理

ポスター

周術期：評価

座長:富松 宏文 (東京女子医科大学)

Thu. Jul 16, 2015 4:50 PM - 5:20 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

I-P-151~I-P-155

所属正式名称: 富松宏文(東京女子医科大学 循環器小児科)

[I-P-151]心房中隔欠損症閉鎖術直後における両心室容量負荷の変化の検討

○水野 風音, 高橋 努, 井原 正博 (済生会宇都宮病院 小児科)

Keywords: 心房中隔欠損症, 左室容量負荷, 左室拡張末期径

【背景】心房中隔欠損症(ASD)術後の左心不全は、術後心嚢液貯留を来しやすい状況を招き、厳格な水分管理を要する。その原因として、低形成の左室が術後には ASD という relief mechanism、または escape valve を失うためとされる。【目的】 ASD 閉鎖直後の両心室容量負荷の変化を心エコーにて定量評価する。【対象】 2011年1月から2014年11月まで当院で手術をした10ヵ月から30歳の17症例。【方法】 心エコーで、ASD 閉鎖前と直後(術後3~7日)の僧帽弁輪径と三尖弁輪径、左室拡張末期径 (LVEDd) を計測し比較検討した。弁輪径は拡張末期で計測した。【結果】 三尖弁輪径の%normalは術前 136.4から術直後111.9に有意に低下し ($p < 0.01$)、僧帽弁輪径の%normalは術前101.5から術直後111.6 に有意に上昇した($p = 0.004$)。僧帽弁輪径/三尖弁輪径比は術前0.75から術直後1.02 に有意に上昇した($p < 0.01$)。術前の僧帽弁輪径の%normalは年齢と有意な負の相関を認めた ($p = 0.03$)が、両弁輪径とも Q_p/Q_s との相関は認められなかった。LVEDdの%normalについては術前 82.2から術直後86.9に有意に上昇した($p = 0.03$)。症例数は少ないが、その後エコーでフォローできた症例では術後14日~30日までに LVEDdは正常値まで回復した。術前 LVEDdの%normalは Q_p/Q_s 及び年齢と有意な負の相関を認めた(共に $p = 0.03$)。【考察】 ASD 閉鎖術後7日以内の早期に、三尖弁輪径、僧帽弁輪径、LVEDdともに有意な改善を示した。しかし、LVEDdの%normalが術後7日ではまだ正常値までは戻らず90%未満であることは、術後早期には左室は相対的に容量負荷の状態であることを意味し、注意深い水分管理が必要な根拠となる。